

## 令和 8 (2026) 年度入学者選抜小論文試験問題(後期)

各受験生は指定の問題に解答すること

## 注 意 事 項

1. 監督者の指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。
2. 問題冊子は全部で 30 ページあり、第 1 ～ 9 ページは下書用紙です。下書用紙は切り離してはいけません。
3. 解答用紙は、問題冊子と別に印刷されているので、誤らないように注意しなさい。
4. 解答は、必ず解答用紙の指定された欄内に横書きで記入しなさい。
5. 各解答用紙には、受験番号欄が 4 か所ずつあります。それぞれ記入を忘れないこと。
6. 解答用紙は、記入の有無にかかわらず、机上に置き、持ち帰ってはいけません。問題冊子は持ち帰りなさい。
7. 落丁または印刷の不鮮明な箇所があれば申し出なさい。

問題 I (後期・共通)

下書用紙

設問 1

5

10

15

20

25

(300字)

問題 I (後期・共通)

下書用紙

設問 2

5

10

15

20

25

A large grid for writing, with a solid border and dashed internal lines. The grid is 25 units wide and 15 units high. The top edge has numerical markers at 5, 10, 15, 20, and 25. The left edge has numerical markers at 5 and 10.

(300字)

問題Ⅱ (後期・医学科)

下書用紙

設問 1

5

10

15

20

25

(300字)

問題Ⅱ（後期・医学科）

下書用紙

設問 2

5

10

15

20

25

(400字)

問題Ⅱ (後期・医学科)

下書用紙

設問 3

5

10

15

20

25

(400字)

問題Ⅱ (後期・歯学科)

下書用紙

設問 1

5

10

15

20

25

A grid for writing, consisting of 20 columns and 10 rows. The vertical axis is labeled '5' on the left side. The horizontal axis has labels '5', '10', '15', '20', and '25' at the top. The grid is formed by solid lines on the top and bottom, and dashed lines for the internal divisions.

(200字)

問題Ⅱ (後期・歯学科)

下書用紙

設問 2

5

10

15

20

25

(400字)

問題Ⅱ（後期・保健衛生学科検査技術学専攻）

下書用紙

設問 1

5

10

15

20

25

(200字)

問題Ⅱ (後期・保健衛生学科検査技術学専攻)

下書用紙

設問 2

5

10

15

20

25

(500字)

## 問題Ⅰ (医学科・歯学科・保健衛生学科検査技術学専攻共通問題)

次の文章を読み、後の設問に答えなさい。

グローバル化が進み、世界共通のビジネスモデルや教育モデルが示される一方で、文化の衝突は思わぬところで起きている。衝突の影響は極めて深刻なのだが、その実態は見えにくく、意識されずに過ぎてしまうことが多い。たとえば母国で優秀な成績を修めた学生が、海外の大学でつまずくことがある。言語や教育方法の違いがつまずきの理由に挙げられがちだが、母国と留学先の作文／小論文の「論理の展開の違い」に根ざした、思考法の違いが原因であることも多い。

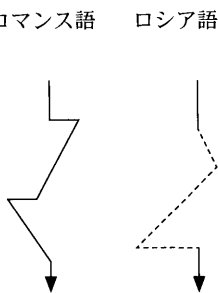


図 言語圏による論理展開のパターン

この文化による論理展開の違いをいち早く指摘したのは、アメリカの応用言語学者カプランである。カプランは、大学で留学生の小論文指導を行うなかで、英語が上達してもなかなか小論文が上達しない留学生が多いことに長年疑問を持っていた。そこでカプランは世界三〇カ国以上から来た留学生の小論文を分析し、図のように言語圏別に論理の展開の特徴を視覚的に分類してみた。

カプランの分類によれば、英語圏は「直線的」な展開、ヘブライ語やアラブ語などのセム語圏は類似することながらを詩の対句のように「平行」させて進む展開、東洋は渦巻きのように主題から遠いところより始めて「間接的に主題に近づいていく」展開、フランス語に代表されるロマンス語圏は余談を交えて「紆余曲折」しながら進む展開と分析されている。そして五つめのロシア語圏は、パラグラフ(段落)の間のつながりがパターン化できないとされている。アメリカ人のカプランにとってロシア語圏の学生の論理展開の解釈が困難だった理由としては、ロシア語圏では美辞麗句と慣用的な表現を使って儀式的に書いたり語ったりする伝統的なレトリックが広く用いられていること、また政治的な理由で意見の直接的な表明が差し控えられることなどが考えられる。論理的というと、英語

圏の直線的な論理展開が自明で普遍的なものを受けとめられているが、カプランの分類を見ても、いくつかある型のひとつにすぎないことが分かる。

カプランによれば、読み手が「論理的である」と感じるには、統一性と一貫性が必要であるという。統一性とは、記述に必要な要素があることであり、一貫性とは、それらの要素が読み手に理解可能な順番で並んでいることである。これらを総合すると、論理的であるということは「読み手にとって記述に必要な要素が読み手の期待する順番に並んでいることから生まれる感覚である」と定義することができる。

ここで重要なのは、「読み手にとって」という部分だ。世界に共通する普遍的な「必要な要素」とそれを並べる「順番」があるわけではなく、読み手がその社会・文化の中で馴染んだ型があり、そこにはいくつかのパターンが認められるというのである。カプランが図で示した四つのパターンは、その型を視覚的に表現したものだ。『矛盾のないこと』が論理学の三原則のもとになっているように、前後の内容に矛盾がないことが作文でも重要である。しかし、その形式論理の無矛盾の原則を守った上で、読み手と書き手の間に作文に必要な要素とそれらを述べる順番についての合意が必要だということである。つまり論理的であることは、社会的な合意の上に成り立っているものだといえる。だからこそ文化圏によって違いが現れる。それは、言語や文化に左右されない論理学の形式論理とは異なる（論理）の考え方である。

論理的であることⅡ「読み手にとって記述に必要な要素が読み手の期待する順番に並んでいることから生まれる感覚である」  
↓論理的であることは社会的な合意の上に成り立っている

カプランは、「それぞれの文化は文化に特徴的なパラグラフの順番を持ち、言語のこの部分の習得は、その文化の論理システムを学ぶことに他ならない」と述べている。このカプランの主張を各言語の文法の構造とパラグラフの構造の類似から根拠づける人もあるが、「必要な要素とそれを並べる順番」は文法という言語の内的システムのレベルではなく、レトリックが扱う作文／小論文

の型（構造／配置）のレベルで考えた方がより有益である。各言語の文法の違いが論理の違いの理由だとすると、私たちは異文化で暮らしても母語の影響からずっと逃れられないことになる。しかしレトリックのレベルで考え、異文化の書く型を使いこなすことによって、異なる論理と思考法を手に入れることができる。

カプランは英語で書かれた留学生のエッセイを分析したために、言語圏別に「直線的」、「平行」、「間接的」、「紆余曲折」の四つの論理展開のパターンを特定した。しかし論理のパターンに注目して文化を分類する方法は、言語や国という単位の他にも考えられる。たとえば、どの国（社会／共同体）にも共通して存在しているのが、政治、経済、法、社会という領域である。これらの領域には領域独自の目的と目的達成の手段が存在しており、それらを混ぜて使うことはできない。混ぜて使おうとすれば、道徳的な警鐘が鳴る。

たとえば、経済領域では効率的に最大限の収益を上げることを目的とするが、この目的を政治領域に持ち込むと汚職となり、法領域では違法となり、社会領域では不道徳となる場合が生じうる。このように四つの領域は独立して存在しているが、どの領域の論理と価値観を重視しているか、つまり国の統合の原理として採用しているかは、教育、とりわけ学校で教える作文を通して判断することができる。なぜなら、教育は知識や技術を教えるのみならず、当該国の伝統や価値観の伝授を重要な目的として持っているからである。

学校は人間形成という明確な目的を持ち、その目的に向かって子どもを形成（教育）する力が系統的に強く働いている。そのため、子どもたちが将来参加していく社会で正しいとされる行為の型やその背後にある規範、価値観がより明らかかな形で現れる。もちろんひとつの国の中でも、地域によって、階層によって、異なる言語や習慣を持つエスニックな共同体によって多様な文化が存在している。しかし、そうした複数の文化的な集団によって構成されている国が、ひとつの国家（社会）として成り立つためには、統合する文化が必要であり、一般には支配層の文化が主流文化として学校（公教育）で教えられていると指摘されている。

では領域が異なると何が変わるのだろうか。まず各領域は固有の目的と目的を達成するための手段を持つている。たとえば、経済ならば利益を上げること、平たくいえば儲けることであり、インプットに対してアウトプットの比重が高いことである。その目的達成のためには、計算による数値の比較によつて最も効率がよく安価な手段を選択する。この時、早くて安い手段を選ぶことが重要であり、手段の選択に関して道徳的な配慮は後回しになるし、哲学的な考察は全く意味を持たない。それに対して政治領域では、公共の福祉という目的達成のために、何が公共の福祉になるのか、社会を構成する多様な人々にとつての共通善とは何なのか、その「目的自体」を吟味し、公共の福祉・共通善という理念／理想に適つた手段を選択する。理念の吟味には哲学的な考察が重要となり、理想の追求には、理念に対する人々の合意が必要になる。

このように価値観とは、何を優先して何を後まわしにするか（犠牲にするか／切り捨てるか）、その順位づけに現れる。そして優先の順位づけは「何を目的とするのか」によつて決まる。

価値観に紐づけられた論理を考える時、「どのような論理が各領域で成り立つのか」、そして究極的には「何のために思考するか」という問いが私たちに突きつけられる。確かに演繹や帰納などの推論の形式、つまり道具としての論理的思考は多様な場面役に立つ。しかしより本質的なのは、「どの領域のいかなる価値観のもとで思考するのか」という価値の選択と、その価値に合致した論理の使用である。経済の問題として捉えるのか、政治の問題として捉えるのかによつて正しい結論と結論に至る道筋は変わってくる。これを単なる制度（領域）の違い、制度固有の表現形式の違いとして受けとめると、私たちはどのような価値観に基づいて思考しているのか、どのような論理を論理的だと受けとめて思考し、判断しているのかに無頓着となり、予期せぬ文化衝突に遭つたり、判断を間違えたりする。

目的の優先順位に価値観が現れる

「私たちはある価値観を優先し、その価値観に紐づけられた各領域の論理を論理的だと考えている」＝実質論理

## 設問 1

傍線部について、「法」と「社会」の領域の例をそれぞれ挙げてあなたの言葉で説明しなさい(三〇〇字以内)。

## 設問 2

筆者は、形式論理に基づく論理的思考だけでなく、価値観に基づいた多様な論理の存在を認めることの重要性を主張している。医療の場面で、価値観の違いがどのような影響を及ぼすかを、具体例を一つ挙げて説明しなさい。その上で医療従事者としてのあなたはどのように対応するか述べなさい(三〇〇字以内)。

## 問題Ⅱ (医学科問題)

次の文章を読み、後の設問に答えなさい。

『論語』とソロバンは、はなはだ遠くて近いもの

弟子たちが孔子のことについて書いた『論語』という書物がある。ここには今、われわれが道德の手本とすべきもつとも重要な教えが載っている。

たいていの人は、『論語』くらい読んだことがあるだろう。わたしはこれに、ソロバンというとても不釣り合いで、かけ離れたものをかけ合わせて、いつもこう説いている。「ソロバンは『論語』によってできている。『論語』もまた、ソロバンの働きによって、本当の経済活動と結びついてくる。だからこそ『論語』とソロバンは、とてもかけ離れているように見えて、実はとても近いものでもある」

わたしが七十歳になったときに、友人が一冊の画帳を造ってくれた。その画帳のなかには『論語』の本とソロバン、一方にはシルクハットと大小の朱色に塗った刀のサヤが描いてある絵があった。ある日、学者の三島毅<sup>みしまき</sup>先生が、わたしの自宅にいらつしやつて、その絵を見られると、こういわれた。

「とても面白い。わたしは『論語』を読む方で、おまえはソロバンを探究している方だ。そのソロバンを持つ人が『論語』のような本を立派に語る以上は、自分もまた『論語』だけで済ませず、ソロバンの方も大いにきわめなければならぬ。だから、お前とともに『論語』とソロバンをなるべくくつつけるように努めよう」

そのうえ、『論語』とソロバンについて、道理と事実と利益とは必ず一致するものであることを、さまざまな例証をそえて本格的な文章に書いてくださった。

わたしは常々、モノの豊かさとは、大きな欲望を抱いて経済活動を行ってやろうというくらいの気概がなければ、進展していかないものだと考えている。空虚な理論に走ったり、中身の無い繁栄をよしとするような国民では、本当の成長とは無関係に終わってしまうのだ。

だからこそ、政界や軍部が大きな顔をしなくて、実業界がなるべく力を持つようにしたいとわれわれは希望している。実業とは、多くの人に、モノが行きわたるようになるにわいなのだ。これが完全でないと国の富は形にならない。国の富をなす根源は何かといえば、社会の基本的な徳を基盤とした正しい素性の富なのだ。そうでなければ、その富は完全に永続することができない。

① ここにおいて『論語』とソロバンというかけ離れたものを一致させることが、今日の急務だと自分は考えているのである。

## 士魂商才

昔、菅原道真は「和魂漢才」——日本独自の精神と中国の学問をあわせ持つ、ということをいった。これは面白いことだと思う。

これに対してわたしは、常に「士魂商才」——武士の精神と、商人の才覚とをあわせ持つ、ということを提唱している。まず「和魂漢才」とは、次のような意味になる。

日本人たるもの、何より日本に特有のヤマト魂というものを基盤としなければならない。しかし中国は国も古いし、文化もはやくに開けて孔子や孟子のような聖人・賢者を出しているため、政治方面、文学方面他において日本より一日の長がある。それゆえ、中国の文化遺産や学問もあわせて修得して、才能を養わなければならない。中国の文化遺産や学問のなかには、書物も沢山あるけれども、孔子の言行を記した『論語』がその中心になっている。

「士魂商才」というのも同じような意味で（人の世の中で自立していくためには武士のような精神が必要であることはいままでもない。しかし武士のような精神ばかりに偏って「商才」がなければ、経済の上からも自滅を招くようになる。だから「士魂」とともに

「商才」がなければならぬ。

その「土魂」を、書物を使って養うという場合いろいろな本があるが、やはり『論語』がもつとも「土魂」養成の根底になるものだと思う。では「商才」の方はどうかというと、こちらも『論語』で充分養えるのだ。

道徳を扱った書物と「商才」とは何の関係もないようであるけれども、「商才」というものも、もともと道徳を根底としている。不道徳やうそ、外面ばかりで中身の無い「商才」など、決して本当の「商才」ではない。そんなのはせいぜい、つまらない才能や、頭がちよっと回る程度でしかないのだ。このように「商才」と道徳とが離れられないのだとすれば、道徳の書である『論語』によって「商才」も養えるわけである。

また世の中を渡っていくのは、とてもむずかしいことではあるけれども、『論語』をよく読んで味わうようにすれば、大きなヒントも得られるものである。だからわたしは、普段から孔子の教えを尊敬し、信ずると同時に、『論語』を社会で生きていくための絶対の教えとして、常に自分の傍から離れたことはない。

(中略)

### 蟹かに穴主義が肝要

わたしは社会に生きていく方針として、今日まで「忠恕」——良心的で思いやりある姿勢を一貫するという考え方で、通してきた。

昔から、宗教家や道徳家といった人々のなかには、立派な学者がたくさん生まれて、道を教えたり、法を立ててきた。しかし結局それは「修身」——自分を磨くということに尽きているのだらうと思う。その自分を磨くということも、まわりくどくいえばむずかしくなるが、わかりやすくいってしまえば、箸の上げ下ろしの間の心がけにも十分その意義が含まれているのだらうと思われる。わたしはその意味において、家族に対しても、客に対しても、その他手紙など何かを見るのにも、誠意を尽くしている。

孔子はこの意味を、次の一節のなかであますことなく説いている。

「孔子が宮城の門に入るときは、身をかがめてつつしんだ。まるで体が門に受け入れてもらえないかのような格好だった。門の

真ん中には立たず、通るときに敷居を踏まなかった。

君主の座る席を通りすぎるときは、本人がいなくても緊張した顔つきで、足取りも慎重だった。言葉づかいも、舌足らずの人のようだった。

着物のすそを持ち上げて、堂にのぼっていくのだが、そのときもつつしんだ様子だった。呼吸をとめて、息をしていないかのように見えた。堂から退出して、階段を一段降りると、顔がゆるんでやわらいだ。階段を降りきって、小走りに進むときはきれいに着物のすそが左右に揺れた。自分の席にもどると、またうやうやしい態度となった」

さらに、礼祭のときや、お客様のもてなし、衣服、日々の生活についても順に述べられ、食物に関してもこういわれている。

「飯はできるだけ精白したものの、膾なますはなるべく細かく刻んだものを食べた。飯がすえて味が変わっていたり、魚や肉がいたんでいたり腐っていたりしていると、口にしなかった。色が変わったもの、悪臭を放つものも食べなかった。また、生煮えのもの、季節はずれのもの、切り方のまずいもの、ソースが料理に合っていないものも、口にしなかった」

これらはごく身近な例だが、道徳や倫理はこれら身近ななかにあるのだらうと思う。

こうして箸の上げ下ろしの間の心がけができれば、次に心がけるべきは、

「口を知る」

ということになる。

世間には、随分と自分の力を過信して、身の丈をこえた望みを持つ人もいる。しかし進むことばかり知って、身の丈を守ることができないと、とんだ間違いを引き起こすことがある。わたしは、

②「蟹は、甲羅に似せて穴を掘る」

という主義で、「渋沢の身の丈」を守るということを心がけている。わたしのようなものでも、今から十年ばかり前に「ぜひ大蔵大臣になってくれ」だの「日本銀行の総裁になってくれ」だのという交渉を受けたことがあった。しかし、

「自分は、明治六（一八七三）年に感ずることがあつて、実業界に穴を掘って入ったのであるから、今さらその穴を這い出すこと

もできない」

と思い固辞した。孔子は、

「進むべきときは進むが、止まった方がいいときは止まり、退いた方がいいときは退く」ともいつておられるが、たしかに人はその出処進退しゅつしよしんたい——仕えるときと辞めるときとの決断が大切なのだ。そうはいっても、身の丈に満足するからといって、意欲的に新しいことをする気持ちを忘れては何もできない。だからこそ、

「なすべきことを完成させない限り、死んでも故郷に帰らない」

「大きな仕事を成し遂げるためには、細事にこだわるべきではない」

「男子たるもの、一度決意したなら、ぜひと伸るか反るかの快挙を試みるべきだ」

といった格言を旨とするのが大切なのだ。そして同時に、自分の身の丈を忘れないようにして、バランスをとらなければならぬ。孔子は、

「欲望のままに振舞つても、ハメを外さない」

といわれたが、この言葉の通りに、身の丈に満足しながら進むのがよいのである。

次に、若い人がもつとも注意すべきことに、喜怒哀楽がある。いや、若い人だけではない。およそ人間が世間とのつきあい方を誤るのは、だいたいにおいて、さまざまな感情が暴発してしまうからなのだ。孔子も、

「関雎かんしよという昔の音楽は、楽しさの表現に走りすぎず、哀しさの表現に溺れすぎなかった」

と述べている。つまり、喜怒哀楽はバランスをとる必要があるというのだ。わたしも酒は飲むし、遊びもするが、常に「走りすぎず、溺れすぎず」を限度と心得ている。これを一言でいえば、わたしの主義は、

「何事も誠実さを基準とする」

ということに外ならない。

(中略)

## 競争の善意と悪意

この講演を聞かれている輸出貿易に従事する人——わたしと同じ実業家の立場の人に「商業道德」などというと、もしかしたら商業だけに道德があるように聞こえてしまうかもしれない。しかし、道德というのは世の中の人すべてが歩むべき道であるから、単に商人だけが持つていければよいというものではない。また、

「商業の道德はこうである」

「武士の道德はこうである」

「政治家の道德はこうである」

と、官僚の制服が線の数で位を表しているように、別々に区分けされているわけでもない。人の歩むべき道であるからには、すべての人が守るべきものなのだ。

孔子の教えでいえば、

「親や目上の者を大切にすることは、仁という最高道德を身につける根本である」

という言葉がある。親や目上を大切にしている行いが、やがては社会の基本的な道德へと大きく育つていたり、良心や思いやりに育つていたりするものなのだ。これを総称して道德と呼ぶようになったのだろう。

ここでは、そうした広い意味での人の踏むべき道德ではなく、商売において、特に輸出商売において注意すべき「競争の道德」について述べておきたいと思う。わたしはこの点をみなさんとよく話し合つて、商売の決めごとを道德的に固めておきたいと深く希望するのだ。

そもそも何かを一所懸命やるためには、競うことが必要になってくる。競うからこそ励みも生まれてくる。いわゆる「競争」とは、勉強や進歩の母なのである。しかしこれは事実である一方、「競争」には善意と悪意の二種類があるように思われる。踏みこんで述べてしまえば、毎日本人よりも朝早く起きて、よい工夫をして、知恵と勉強とで他人に打ち克つていくというのは、まさしくよい競争なのだ。しかし一方で、他人のやったことが評判がよいから、これを真似してかすめ取つてやろうと考え、横合いから成果

を奪い取ろうとするのは悪い競争に外ならない。

ただし、簡単に善悪二つに分けられるにせよ、そもそも事業にはさまざまあつて、競争の種類もいくつもある。そのなかで性質が善でない競争に携わつた場合、状況によつては利益が転がり込んでくることもあるだろう。しかし多くの場合は他人を妨害すること、やがて自分の損失にもつながつてしまう。さらに自分や他人という関係ばかりでなく、その弊害が国家に及んでしまうこともある。「日本の商人は困つたものだ」と外国人にまで軽蔑されるようになれば、その弊害はとても大きいといわざるを得ない。

今お集まりのみなさんは、もちろんそのようなことはないと思うが、万一のことを考えて、ここでは老婆心を述べさせて頂いている。どうも世間には、押し並べてこのような弊害が多いとも聞く。特に雑貨輸出などの商売において、悪い意味での競争、つまり道德に欠ける行いが他人を傷つけて、自分の損失ともなり、国家の品位まで落としてしまつてゐる。商工業者の地位を高めようとしてお互いに努力してきたはずなのに、なぜか反対に低めることになつてゐる。

では、どのような経営をすればよいのか。事実立脚しないと、こういうことははっきりとはいえないものだが、わたしは善意の競争に努めて、悪意の競争を避けるということがよい、と思つてゐる。悪意の競争を避けるというのは、お互いが商業道德を尊重する強い意志を持つことだ。そうすれば、どんなに商売に励もうが悪意の競争に陥ることはない。どの一線を越えてはならないかというのには、『バイブル』を読んだり、『論語』を暗誦しなくとも、必ずわかるものだろう。

もともとこの道德というものをあまりむずかしく考へてしまい、東洋の道德でよく見られるように、格式ばつた文字を並べ立てていると、道德が茶の湯の儀式のような形骸化に陥りかねなくなる。一種の唱え言葉になつて、道德を説く人と、道德を行う人とが別になつてしまふのだ。これではなはだ不都合ではないか。

そもそも道德は、日常のなかにあるべきことで、ちよつと時間を約束して間違えないようにするのも道德なのだ。また、人に對して譲るべきものは相応に譲るのも道德である。またあるときは、人に先んじて人に安心感を与えるのも道德になる。何かをするのに弱い者を助ける心を持たなくてはならないのも、道德なのだ。

もちろんちよつと品物を売るというだけでも、道德はそのなかに含まれている。だから道德というものは、朝から晩までついてもまわつてくるものなのだ。ところが、道德をとてむずかしいもののように見なして、普段は道德を隅の方に追いやつておきなが

ら、

「さて今日から道徳を行うぞ」

「この時間が道徳の時間だ」

といったように仰々しくやろうとする場合がある。そんな億劫ちやくきやくなものではないのだ。

もし商工業において「競争の道徳」なるものがあつたなら、何度も繰り返している通り、善意の競争と悪意の競争というものを考えなければならぬ。妨害によって人の利益を奪う競争であるなら、それは悪意の競争というのだ。一方で、品物を徹底して選りぬぎ、他の利益を奪うようなことをしないのが、善意の競争なのだ。この二つの境界線は、どんな人でも自分の良心に照らし合わせてみれば、わかることだと思ふ。

要約すれば、どんな仕事にもかかわらず、商売には絶えざる自己開発が必要なのだ。また、気配りも続けなければならない。進歩はあくまでしていかなければならないが、それと同時に悪意の競争をしてはならないことを、強く心に留めておかなければならない。

(渋沢栄一『現代語訳 論語と算盤』守屋淳訳 筑摩書房 二〇一〇年より)

### 設問 1

傍線部①『論語』とソロバンというかけ離れたものを一致させること』の意味を説明しなさい(三〇〇字以内)。

### 設問 2

傍線部②「蟹は、甲羅に似せて穴を掘る」の意味を、自分自身の経験を例にして説明しなさい(四〇〇字以内)。

### 設問 3

本文を参考に、現代の医療の道徳についてあなたの考えを述べなさい(四〇〇字以内)。

## 問題Ⅱ (歯学科問題)

次の文章を読み、後の設問に答えなさい。

### 偏差値ができた背景

日本の若者の多くは受験勉強を強いられ、偏差値を気にしているだろう。日本では長年にわたり偏差値によって学校は一直線にランク付けされ、受験生たちは模擬試験や本試験の結果に一喜一憂している。誰もが自由に学ぶ権利をもつはずなのに、学校にランク付けがあり、入学試験で排除することがあるということは奇妙でもある。

また、さまざまな研究分野をもつ大学が、なぜ「私立文系」「国立理系」といった雑なくりのなかで序列がつけられるのだろうか。私たちはそれぞれ興味を持つことが異なり、そもそも興味や得意は、中学や高校で行われる教科からはみ出ることが多いだろう。

さらに大学に行ってから多様な学びと研究は、高校までの画一的な数科とはまったく質が異なる。学生自身一人ひとりの願いは異なり、大学の学部の学びの多様さがあるなかで、偏差値という単純な数字を頼りにして序列化することで何が判断されてきたのだろうか。しかし、これほど当たり前のものとして受け止められているのは、数字の呪縛がそれだけ強いということでもある。

一九五七年に東京都港区の中学校教員だった桑田昭三が、学力偏差値を考案した。当初は教員の勘に頼っていた進路指導に、信頼できる指標を導入することが目的だったのだが、次第に偏差値は独り歩きし、偏差値そのものが勉強の目的となっていく。例えば英語の学習は英語が使えるようになることではなく、英語のテストの偏差値が上がるのが目的となっている。偏差値そのものは、テストの点数が正規分布すると仮定される母集団のなかで、どの位置にいるのかを示す統計的な指標にすぎない。

本章では「偏差値で人の能力が測れるのか？」と批判したいだけではなく、そもそも「人間を数値化して比較することで、私たちは一体何をしていることになるのだろうか？」と問いを立てたい。それは数値化・序列化がもたらすものを考えていくためであ

る。

数値至上主義は偏差値に限った話ではない。社会に出たらあらゆる活動が数値で測られる。例えば大学教員である私は、毎年何本論文や著作を出版したのか、いくら助成金を獲得したのかを大学に報告する。業績の報告のあと、年度末に次年度の目標を立てて提出している。つまり目標と成果が数値で計測され評価されるのだ。民間企業に勤めている人たちは、もちろん私どころではない。

さらに、個人の問題だけではなく、学部としても次年度の数値目標を立て、年度末に達成状況を大学本部に報告する。大学全体でも同じデータ集めは行われており、各学部で作成させた六カ年ごとの中期計画のデータを集計して文部科学省へと報告して国からの評価を受けている。

つまり個人から組織、国家にいたるまで、子どもから大人にいたるまですべて数値で評価されている。数値に基づいて行動が計画・評価され、価値が決められるのだ。

## 統計がもつ力

### エビデンスにもとづく医療

もちろん数値化されるのは人だけではない。自然と社会を含む森羅万象が一九世紀にいたって数値で測られるようになった。そして、この数値化は、統計学の支配という形を取ってきた。たとえば現在、医療の世界では「エビデンス(根拠)に基づく医療(Evidence Based Medicine)」が絶対的な価値を持つ。これは統計学的に病態を分析し、統計学的に有効であると認められた治療法を選択するという営みだ。一九九一年にカナダの医師ゴードン・ガイアットが提唱した考え方である。

医療のエビデンスにはいくつかのグレードがある。もっとも確度の高いエビデンスは、患者を、ランダムに薬を投与する群と薬を投与しない群というように二つの群に分けて有効性を検討するランダム化比較試験(RCT)を、さらに複数比較し、メタ分析し

た結果である。RCTの根っこには統計的な妥当性の評価がある。統計的に検討された複数の試験を組み合わせることで、妥当性を上げていく。

エビデンスによって有効な診断方法や治療法が整備されるということには異論がないし、私自身もエビデンスにもとづく医療を選ぶ。しかし病の経験は、エビデンスにもとづく選択だけでは語り切れない。

再発がんが進行しているので「急に具合が悪くなる」可能性があるから、と緩和ケアを探すことを主治医から勧められた哲学者の宮野真生子は、エビデンスにもとづく医療において常に問題になるリスクについて次のように述べている。

リスクと可能性によって、「がんが再発した」私の人生はどんどん細分化されていきます。しかも、病と薬を巡るリスクはたくさんありますから、そのなかで、良くない可能性が人生の大半の可能性を占めるように感じ、何も起こらず「普通に生きてゆく」可能性はとても小さくなったような気がしています。(中略)

でも、このリスクと可能性をめぐる感覚はやっぱりどこか変なのです。

おかしさの原因は、リスクの語りによって、人生が細分化されていくところにあります。そのとき患者は、いま自分の目の前にいくつもの分岐ルートが示されているように感じます。それぞれのルートに矢印で行き先が書かれていて、患者たちはリスクに基づく良くないルートを避け、「普通に生きていける」ルートを選び、慎重に歩こうとします。

けれど、本当は分岐ルートのどれを選ぼうと、示す矢印の先にたどり着くかどうかはわからないのです。なぜなら、それぞれの分岐ルートが一本道であるはずがなく、どの分岐ルートもそこに入ってしまうば、また複数の分岐があるからです。

エビデンスによって有効とされる治療を選ぶプロセスには際限がない。病が進行していくプロセスのなかで、効果が出る確率が高い治療法が選ばれることが多いだろう。しかし確率が高いといっても「四〇〇の人にはこの治療法が有効であった」という意味であり、残りの六〇%の患者には効かない。つねに数値をめぐる患者は「効かないかもしれない」と不安な状態に置かれることにな

る。宮野はこの手紙から半年ほどのちに四〇代前半で亡くなったが、エビデンスに基づくリスク計算に追われてしまうと、人生の残り時間が確率と不安に支配されるものになってしまうだろう。

(村上靖彦著『客観性の落とし穴』 筑摩書房 二〇二三年より)

#### 設問 1

「人間を数値化して比較すること」の功罪について「偏差値」を例に説明しなさい(二〇〇字以内)。

#### 設問 2

「人間を数値化して比較すること」を医療に適用する際の問題点について、あなたの考えを述べなさい(四〇〇字以内)。

## 問題Ⅱ (保健衛生学科検査技術学専攻問題)

次の文章を読み、後の設問に答えなさい。

### ゲラダヒヒの平和社会

「先生は認知症の老人とどう心を通わせているのですか」と、研修医に質問されたことがあります。わたしはある精神病院へ短期実習生としてくる彼らに、<sup>※</sup>痴呆状態にある人とのコミュニケーションのとり方を手ほどきしています。彼らの出来は不揃いですが、「心を通わす」という表現をした研修医は筋がいいと思いました。話を通じさせる、ではなく、心を通わすのが、認知症の老人とのコミュニケーション(意思疎通)の極意である、とわたしは思っているからです。

では、その老人とどういうコミュニケーションを図るのが「心を通わす」ことになるのでしょうか。認知症は記憶を中心とした認知能力の低下にはじまり、コトバを理解し、自分の考えをコトバで表現する能力が次第に衰えていき、最後は、コトバ自体が失われてしまうのが自然な経過です。その中ではコトバによる彼らのコミュニケーション、理解・表現という働きも、常識的に見ると変容していくように見えます。

コミュニケーションという名詞には、コミュニケイトという英語の動詞が対応しており、ラテン語のコミュニカレに由来します。これには情報を共有する、という現代人が理解する意味と同時に「共に楽しむ」という古義があり、「楽しい」という情動(感情)を共有するという含意があります。現在のコミュニケーションには「情動共有」という働きがどの程度残されていて、それが認知能力の低下した人々の間ではどう機能しているのか、その答えを見出すために、そもそもコトバによるコミュニケーションとはどんなことか、吟味する必要があります。

コトバの起源を思わせる例を紹介します。エチオピア高原に棲むゲラダヒヒ(ヒヒの一種)はおしゃべりですが、その社会生活に

はいくつかの特徴があります。まず、ユニット(家族)と、その上位集団であるバンド(村)からなる重層社会であり、そしてユニット間、バンド間には対等・平等で、暴力を使わない平和社会を形成している。にわかには信じがたいことですが、多数のバンドが高原に集合する時期、何百頭ものヒヒが入り混じっても、暴力沙汰はいっさい観察されません。河合雅雄氏によれば、彼らには、「音声表象(シニフィアン)」と「意味表象(シニファイエ)」の結合したコトバというものはなく、彼らの「音声」だけのコミュニケーションでは、音声は「相手を安心させる、なだめる、懇願するといった社会関係の調整」に使われているといえます。

ヒヒたちが「情報」を伝えるコトバではなく、音声という「情動」に訴えるコミュニケーション手段を用いることが注目されます。それでトラブルが暴力に発展することを防ぎ、仲間同士のつながりを維持している。情動に訴える方法は、それほど相手の気持を落ち着かせ、不安や怒りを抑え、結果として和を保つのに効果があるのでしょうか。ヒトの社会でも、理屈すなわち情報共有型コミュニケーションに頼りすぎると、しばしば人間関係を損なうことは、夏目漱石が「智に働けば角が立つ」と喝破している通りです。

コトバが情報と同時に情動を共有させる働きをもつに至った経緯は、容易に想像できません。人類の祖先がコトバを話しはじめ、狩猟採集で生きていた数百万年間、飢餓の恐怖は慢性的にあつたと推測されます。偵察から帰った男がもたらす「森のはずれに手傷を負ったマンモスがいる」というような情報を共有できないかは、食料の乏しい季節には生死を分ける重大事でした。この情報伝達は「情動」をゆさぶらざるをえません。肉を飽食できる、自分が生きていけるといふ見通しは、必然的によろこび、情報提供者への感謝、親愛、信頼を生みます。

情報共有がこれらの感情を誘起するとすれば、コミュニケーションの古義に「共に楽しむ」「親密な関係をつくる」があつたのは自然です。古代、現在の物質的豊かさはもちろんありませんでしたから、集団の存続や個人の生存には、濃密な人間関係に支えられた共同作業が必要でした。親しみや信頼をつよくするコトバの心理的側面は、今よりははるかに重視されていたものと想像できます。ゲラダヒヒの音声コミュニケーションほど完璧には出来なかつたでしょうが。

## 偽会話となじみの仲間

グループホームの居間で、幾人かの女性が和気あいあいと談笑しています。アルツハイマー型の認知症と診断された方々で、どうも会話の内容がバラバラです。

「主人なんてやっかいなもんです。でもいないと困るし……」

「そうそう、うちの息子が公認会計士になりましたんで忙しくてね」

「あら、いいじゃないとつても。浴衣を着ればステキに見えるよ」

「〇〇さん辛かったらうに。いつも△△さんって言っていましたよ」

話は快調に進んでいるようでも論理のつながりはなく、相手の話を理解するより、子どもたちがゲームをしながら勝手にお喋りしているみたいです。

認知症のケアにあたる人の間でよく知られた「偽会話」、つまり「会話」であっても情報共有という働きが失われたコミュニケーション形態ですが、「共に楽しむ」という情動レベルでは、コミュニケーションは立派に成立しています。偽会話の成立は、彼女たちが喋られた内容を論理として理解はできないし、また直ぐ忘れてしまうことを考慮すれば了解できます。

しかし、楽しい情動を共有するという経験を重ねると、理屈を超えた親しい関係が成立します。熊本の国立療養所菊池病院で長年認知症の人々をケアし、観察された室伏君士先生は、このような親しい関係にある人たちを「なじみの仲間」と名づけました。彼らの関係は、時にびっくりするような心理効果を現します。

たとえば、グループホームに適応し落ち着いているご婦人を久しぶりに自宅外泊させると、帰ったその晩にせん妄状態になり、お嫁さんに向かって「この人殺しが」と叫んだりする。たまりかねた家族が翌日ホームに連れ戻すと、なじみの仲間が「〇〇さん遊びましょうよ」と迎えてくれ、血相を変えていたご婦人が途端に穏やかになって談笑しだすという具合です。

こういう事例は全国の施設で観察されており、コミュニケーション成立の働きが、心の深奥の情動領域において営まれることを物語っています。

「理解する」は大事ではない

偽会話を初めて知ったとき、興味を抱きながらもわたしには関係のない現象と思いましたが、自分のコミュニケーション理解の浅はかさに、やがて気づかされました。

病棟の看護ステーションに入ると、忙しく働いている看護師や介護士たちに「お早うございます」とか「今日は」と挨拶します。患者一人一人に声をかけるのはいうまでもありません。英語なら「How are you?」と相手の状態をたずねますが、「今日は」を英語にそのまま訳すと「Today is」ということで、別に意味や情報はありません。それでも「コンニチワ」は、一人であれ大勢であれ、そこにいる全員にわたしのある「善き意図」を伝えられる。大きいほがらかな声で挨拶し、返事が返ってくる時、ある情動的コミュニケーションが成立したことを体感できるのです。

※原文の表現に依拠している。

(大井玄著『痴呆老人』は何を見ているか』新潮社 二〇〇八年より)

## 設問 1

文中で述べられている「コミュニケーションの二種類の型」について、説明しなさい(二〇〇字以内)。

## 設問 2

本文を踏まえ、人への挨拶とコミュニケーションの成立について、あなたの考えを経験を基に述べなさい(五〇〇字以内)。